

Title	脂質は悪玉か善玉か : スフィンゴ脂質の悪性腫瘍に 対する作用について
Author(s)	岡崎, 俊朗
Citation	癌と人. 2007, 34, p. 25-26
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/23722
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

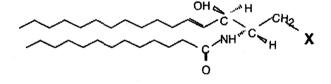
## 脂質は悪玉か善玉か

## ―スフィンゴ脂質の悪性腫瘍に対する作用について―

岡崎俊朗\*

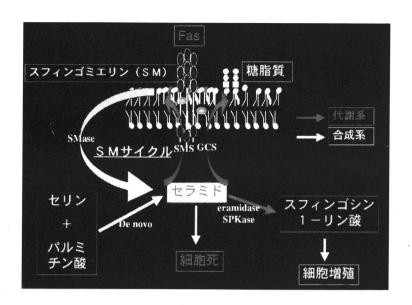
平成17年度の研究助成として,「植物由来アポトーシス誘導脂質セラミドの経口摂取による血液腫瘍に対する抗ガン剤感受性増強法の研究」課題を採択していただきました。今回の研究は,成人病などで一般的には動脈硬化症を誘引する悪玉脂質として名高いLDLコレステ

ロールなどと生化学的な分類では同じ範疇に入るスフィンゴ脂質セラミドが悪性腫瘍に対しては、アポトーシスという携帯の細胞死を誘導することで増殖抑制に働き、決して悪玉ではなく善玉脂質であることを明らかにするプロジェクトです。



スフィンゴ脂質は、上図のように2分子の脂 肪酸がセリンと結合することで、生成されます が、その基本骨格構造がセラミドです。セラミ ドは上図のXが水酸基であり、種々の糖鎖構造 が追加されるとスフィンゴ糖脂質となります。 これまで、このスフィンゴ脂質は、細胞膜の構 造を支える分子として重要であることが明らか にされていましたが、私が米国留学当時にこの セラミドが白血病細胞の分化・増殖に細胞内メ ディエーターとして働き、機能性脂質であるこ とが明らかにしました。近年は、細胞膜が均一 な脂質より構成されるのではなく, セラミド, スフィンゴミエリン (SM:上図Xがフォス フォコリン) などのスフィンゴ脂質ならびにコ レステロールが不均一に平面化し、さまざまな ストレスなどのシグナルが細胞外より刺激され ると、微少部分でさらなる脂質組成の変化によ りミクロドメインと呼ばれる構造が生じる事が 報告されています。すなわち細胞内での脂質シ グナルのみならず細胞外シグナルを細胞内へ伝 達する受容体の機能をスフィンゴ脂質が抑制す ることが明らかとなりました。

このことをアポトーシス誘導シグナルである FASの刺激伝達経路に沿って説明します。ま ず、下図に見られるように、FAS抗体の架 橋によりFAS抗原は3量体、その後に凝集 し、キャップ構造と呼ばれる集合体を形成する ことで、細胞内シグナルを増強することが知ら れています。この初めのステップにおいて、S Mならびにセラミドは非常に重要な役割を演じ ています。この役割には、(1)細胞膜での物理 特性を変換する作用と(2)細胞内のシグナルと しての機能の2つが考えられます。(1)の作用 にはセラミドからSMを産生するSM産生酵素 が、(2)にはFAS刺激によりスフィンゴミエ リナーゼが活性化し、セラミドからSMを産生 することで、細胞死のシグナルが伝達されます。 "SMサイクル"と呼んで、その機構解析を白 血病の細胞増殖作用において研究中です。今回 の課題は、この細胞死を誘導するセラミドを、 細胞内の酵素活性の制御ではなく, 直接細胞外



から食事として取り込むことで、抗がん作用が 発揮できるかについて検討しました。動物実験 の段階ですので、ヒトにおける有用性は将来の 問題ですが、蛍光で、副作用のでない十分量の セラミドを摂取したマウスでの腫瘍細胞の増殖 は、抑制される傾向が見られました。実際に、 臨床現場でも、白血病患者さん由来の腫瘍細胞 で抗ガン剤に耐性になった細胞はセラミド量が 低下しており、"SMサイクル"がセラミド産 生抑制の方向に制御されていることがわかって います。したがって、今後、セラミドを細胞の 内から関連酵素を制御すること、細胞の外から 直接セラミドの取り込みを増強する、2面作戦 で腫瘍細胞の増殖に対して効果のある、新規治 療法の開発を推進させたいと考えます。最後に なりましたが、紙面をお借りしてこの研究助成 をお受けした栄誉にたいしお礼申し上げるとと もに、その責任を今後の研究を推進することで 果たしたいと祈念しております。

\* 鳥取大学医学部附属病院 血液内科 平成 17 年度一般学術研究助成金交付者